

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520041

研究課題名(和文)明代郷・会試「三場題目」の思想史的考察

研究課題名(英文) Research on the characteristic of questions in the Civil Examination during the Ming Dynasty

研究代表者

鶴成 久章 (TSURUNARI, HISAAKI)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20294845

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：明代に実施された科擧の出題内容を調査し分析する作業を通じて、明代の科擧の科目においては具体的に何が問題にされ、それは思想史の展開といかなる関係を有したのかという点について様々な観点から考察を行った。また、科擧試験の出題の動向が、講学活動をはじめ当時の学術・思想の動向にどのような影響を与えたのかという点についても基礎的な考察を行った。

研究成果の概要(英文)：Through a study to investigate the characteristic of examination questions, and to analyze, I clarified what was considered very important in the Civil Examination of the Ming Dynasty. In addition, I considered how the examination questions had related to the Confucianism thought in those days concretely. Furthermore, I performed basic consideration what kind of influence examination questions had on then school education and thought culture.

研究分野：人文学

キーワード：明代 科擧 出題 思想史 教育史

1. 研究開始当初の背景

明代の科挙制度に関する資料を思想史的な関心から分析した研究は、本研究を開始した当初は極めて低調であった。特に科挙試験の出題内容を分析して、それを当時の思想史の流れの中で考察する研究は非常に少なかった。その主な原因としては、最も基本的な資料である明代の「登科録」が、かつては七十種以下しか閲覧できなかったことが大きい。ところが、2006年頃から現存する明代「登科録」の大部分を所蔵する天一閣の蔵書が公開され始めた結果、四百種を超える明代「登科録」が閲覧可能になった。これは研究資料の充実という点において画期をなす出来事であり、従来は資料の閲覧が不可能なため二次的な資料の整理・分析や、零細な資料の博搜に時間を取られて本質的な部分の解明が不十分であった研究課題に精緻な考察を行う道が開けてきた。本研究はそのような背景のもと着手した。

2. 研究の目的

本研究においては、明代の郷試と会試における全三場の全出題についてその内容を整理し、出題傾向の時代的な変化(会試・郷試)や地域的な特徴(郷試)を分析し、明代の科挙において何が問題にされたのか、そして、それは思想史の展開とどう結びついていたのかという点を明らかにすることを第一の目的とした。そして、最終的には、その成果を踏まえて、科挙の出題内容が、経学・性理学、書院講学をはじめ、当時の思想・学術活動に及ぼした影響について幅広い観点から考察していくことを目指した。

3. 研究の方法

(1) まず、会試については、『明代登科録彙編』『天一閣明代科挙録選刊』『中国科挙録彙編』その他個別に収集した明代の「会試録」を主な資料に、全八十九回分の会試の第一場(「四書義」「五経義」)、第二場(「論」「詔・誥・表」「判」)、第三場(「策」)の出題内容を整理し分析した。天一閣の明代「登科録」コレクションは、万暦十一年(1583)科までで収集が終わっているため、第一場の「四書義」「五経義」の出題の分析に際しては、種々の「八股文」の撰集や『制義叢話』等の二次的資料を活用した。また、第二場の「論」と第三場の「策」については、「会試録」が残っていない科(全体の約三割)については、考試官を務めた人物の別集に収録された資料、各種挙書書を二次資料として活用した。次に郷試については、「郷試録」は散佚したものが多く、時代的には正統元年(1436)から万暦十一年(1583)までの科が大部分で、地域的には順天府(北京)、応天府(南京)、浙江省、江西省、山東省が多くを占めるなど残存状況に大きな偏りがある。もっとも、残存率が低いとはいえ、現在残る「郷試録」は約三百六十種もあることから、まずは第一場、

第二場に限定して分析を行った。具体的な研究の方法は、前年に実施済みの会試の出題の分析データを参照しながら、会試の南卷(応天、浙江、江西、福建、湖広、広東)北卷(順天、山東、山西、河南、陝西)中卷(四川、広西、雲南、貴州)の地域区分ごとに、各科の会試の前年に行われた郷試(十二~十五省)全九十回分の第一場(「四書義」「五経義」)、第二場(「論」「詔・誥・表」「判」)の出題内容を分析し、郷試の出題が翌年の会試の出題に影響を与えているのか否か、与えているとすればそれはどういう観点であるのかという問題について考察した。また、郷試の出題の観点が二年前の会試の出題の影響をどの程度受けているのかについても考察した。

そして、最終年度には、郷試の第三場において出題された「策」題のデータを整理して、その出題傾向について具体的な分析を行うことを中心に取り組んだ。その際には、第一場、第二場の出題の分析と同じ観点に加えて、対象とする地域(省)の思想史的伝統や思想風土に根ざしたその地域に特有の思想的テーマ(地域の先賢・思想家の存在など)を意識した内容がどの程度含まれていたのかという点についても十分に留意した。

(2) 科挙の出題動向が、当時の学校制度や書院制度といった教学制度とどういう関連を有したのかという問題について考察を行った。特に、書院講学活動との関係については詳細に考察を行った。

また、「永楽三大全」をはじめ、明代科挙の出題内容を実質的に左右した経学・性理学関係の著作の位置づけについて、実際の出題内容と具体的に対比しながら考察を行った。

さらに、当時の朱子学者・陽明学者が重視した思想テーマが、科挙の場でも頻りに問われていたのか、あるいはそれらは書院講学等、他の場で取り扱われたのかという問題についても基礎的な考察を行った。

4. 研究成果

(1) 2012年度から当初の計画に従い、会試の出題内容、続いて郷試の出題内容を整理し分析した。その結果、まず、これはほぼ予想通りとはいえ、洪武初年の制度の創始期や歴代皇帝の即位直後には、慶事を言祝ぐような出題が行われていることが確認できた。また、同時期に挙行された郷試の出題と会試の出題とに共通の時代的特徴が見いだせることもほぼ明らかになった。ただ、郷試と会試の試験科目、出題の方法、答案審査の方法等が全く同じであったことから、前後する郷試と会試との間でその出題が直接的な影響関係にあったのか否かという点については、今後改めて詳細な検討が必要であると考えている。

明代の前半期には、郷試と会試の出題は、忌避語や不敬のテーマの使用等を除けば、比較的自由に行われていたと言ってよい。それが目立った変化が生じるのは嘉靖帝の即位

後であり、嘉靖年間には皇帝の機嫌をうかがうような出題が度々行われていることが明らかになった。これらの研究成果の一部は、『概説 中国文化史』の第9章「科挙」の内容に反映させた。また、洪武・永楽年間を中心とする明初の時期について考察を行った成果がまとまりつつあり、現在、論文のかたちで発表する準備を進めている。また、郷試と会試の出題に思想的・社会史的時代背景が最も鮮明に反映されていた嘉靖年間の出題の分析から得られた考察に焦点を絞った研究についても、現在論文にまとめる方向でデータを整理している。

なお、隆慶年間以降、特に明末の激動期に、当時の社会情勢を反映したような出題がなされていたのか否かという問題については資料の制約もあって、考察がまだ不十分であり、改めて研究の手法を構築する必要があると考えている。

以下、幾つかの個別具体的な問題を取り上げて、本研究で得られた知見を簡単に述べることにする。

「四書義」については、当時の科挙の出題と「四書」学がどのような関係にあったのかを分析するために、『大学或問』『中庸或問』の論点と「四書義」の出題傾向について考察した。その結果、明中期以降は出題のサイクルが固定化したこともあり、明代思想史において最も重要な意義を有した『大学』の出題すら当時の思想界の流行をそのまま反映させていたとまでは言えないことが明らかになった。

「五経義」については、「五経」には喪礼関係の篇や忌避語を含むため出題に適さない箇所がかなりあり、また、選択必修の科目であったこともあり、「四書義」以上に出題の固定化が進んだ状況が明らかとなった。因みに、「五経義」のうち、『詩経』については、本研究遂行の過程で、種々研究交流を行った台湾の侯美珍氏が専著を出版した（『明代郷会試詩経義出題研究』、学生書局、2014年）。侯氏は『礼記』と『書経』についても専著の出版を計画しており、『礼記』については既に二篇の論文を発表している。したがって、『詩経』『礼記』『書経』については、侯氏の研究を仔細に検討した上で、今後さらに別な角度から研究を一層発展させる必要があると考えている。

上述のような研究状況の変化により、「五経義」については、『春秋』を中心に組み込んだ。『春秋』は合題（伝題）という特殊な出題が行われていたことから、出題全体の総合的な考察には色々と困難がともなったため、まずは明代の『春秋』学の特徴を明らかにする作業の一環として、江西安福の『春秋』学を詳細に分析した。その成果の一部は、「明代安福の『春秋』学 挙業から見た学問的系譜」にまとめた。なお、この論文の発表（論文作成に先立ち概要を口頭でも発表）とほぼ同時期に、台湾の林穎政氏が『明代春秋学研

究』（致知学術出版社、2014年）で、類似の観点から考察（第三章「科挙と経学：胡《伝》的独尊与《左伝》的復興」第四節「麟経淵藪的区域分布与实际情況」）を発表し、また、中国の陳時龍氏も、「明代科挙之地域専経以江西安福鼎的《春秋》経為例」（『歴史語言研究所集刊』第85・3、2014年）という論文を発表している。本研究で取り組んだテーマは海外でも研究者の注目を集めつつあり、今後はそれらの成果を参考にしつつ考察をより発展させる必要があると考えている。

なお、『易経』については、繫辞伝の出題が顕著で「五経義」の四問中二問が繫辞伝であることすら珍しくないこと等を明らかにしたが、これらの問題についても、今後改めて考察を深めるつもりである。

「論」については、出題が単句一題のみで、その出題は性理学や聖賢の徳治といった内容に限られていたため、出題の傾向の特色はあまり鮮明ではない。なお、「論」題をめぐる主要な論点は、つとに三浦秀一氏が考察を発表している（『明代科挙『程論』管窺』、『第四届科挙制与科挙学学术研讨会・英辞集』、2008年）。本研究では、当時はまだ公開が進んでいなかったため、三浦氏が十分には利用できなかった「郷試録」を活用することができたが、現時点で、三浦氏の研究をこえるような成果は得られていない。しかし、第二場の「論」が担った主な役割を性理学の議論とみなした上で、その意義を宋代から清代に至るまでの時期を通時的に考察した研究を進めていく構想が得られた。

「策」についても、既に三浦氏の極めて優れた研究（『明代科挙『性学策』史稿』、『集刊東洋学』103、2010年）があるため、本研究では、それとは異なる視点からの考察を中心に行った。特に、三浦氏が十分には取り上げていない郷試の「策」題の地域性の問題について、本研究では重点的な考察を行った。その結果、郷試が実施された各地域（省）の思想的伝統や思想風土に根ざした地域特有の思想的テーマを意識した出題をめぐって、興味深い知見が少なからず得られた。

具体的な事例を一部のみ示せば、福建郷試における朱熹、河南郷試における二程、山西郷試における張載を取り挙げた「策」題に見られる特色、順天郷試や山西郷試における北虜、福建郷試における倭寇をめぐる出題に見られる特色等である。このテーマについては、今秋に参加予定の国際会議で報告すべく準備を進めている。

（2）明代科挙の郷試・会試における出題と当時の思想界で盛んに議論されたテーマとの関係について考察を進めた結果、もっとも特色がある時期として嘉靖年間が浮かび上がってきた。嘉靖年間は朱子学と陽明学の対峙が最も顕著になった時期としてこれまでも注目されていたが、科挙の出題に関してもその実態が検証できたとと言える。

本研究では、上述のような分析結果・考察

内容を土台にして、明代の教学制度と陽明学との関係について発展的な考察を行った。その研究成果の一部としては、まず、「天真精舎と陽明門下」(『哲学資源としての中国思想』、2013年)がある。これは、陽明学を創始した王守仁の死後、嘉靖年間に陽明学の思想がどうかたちで広がっていったのかという問題について、書院制度との関係に焦点を絞って考察した研究である。また、「中国近世の書院と宋明理学 講学という学問のかたち」(『学問のかたち』、2014年)という論文も発表した。これは、宋代から明代に至るまでの書院制度の発展過程を通時的に考察することで、中国近世の教学制度と思想史との関係の一端を跡づけたものである。

さらに、「永楽三大全」をはじめ、明代科挙の出題内容を実質的に規定した経学・性理学関係の著作の位置づけについても、それらの著作の内容と科挙の出題とを具体的に對比しながら考察を行った。その関連の研究成果としては、『四書纂疏』所引の朱子学文献について『朱子語録』を中心に(2014年)がある。

上述のように、本研究を通じて、明代思想史の展開過程と科挙制度との関係について有意義な分析結果が少なからず得られた。そして、それだけにとどまらず、当時の朱子学者・陽明学者にとって思想的に重要なテーマが熱心に議論された書院講学活動の考察を中心に、本研究をさらに発展させていくための具体的な構想もできあがった。現在はこのテーマの研究に既に着手している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

鶴成久章、明代安福の『春秋』学 挙業から見た学問的系譜、福岡教育大学国語科研究論集、第56号、査読有り、75-91頁、2015年

鶴成久章、『四書纂疏』所引の朱子学文献について『朱子語録』を中心に、中国中世文学研究、第64号、査読有り、291-306頁、2014年

鶴成久章、『明状元図考』訳注(稿)五、福岡教育大学紀要、第62号第1分冊、査読無し、29-4頁、2013年

鶴成久章、陽明学の聖地に残された石刻「天真精舎勒石」について、汲古、第62号、汲古書院、査読有り、47-52頁、2012年

〔学会発表〕(計4件)

鶴成久章、明代安福地区的《春秋》学 科挙伝統中的学譜系、第十一届科挙制与科学学国際学術研討会、2014年11月15日、広州保利假日酒店、中国・広州

Inherent in an Examination System: A Study Focusing on the Civil Service Examinations during the Ming、The Eighth The International Convention of Asia Scholars (ICAS8)、2013年6月25日、中国・澳門

〔図書〕(計6件)

湯浅邦弘、ミネルヴァ書房、概説中国文化史、2015秋(刊行予定)、ページ数未定(第9章「科挙」を執筆)

小南一郎、汲古書院、学問のかたち もう一つの中国思想史、2014年、360頁(149-175頁)

吉田公平教授退休記念論集刊行会、研文出版、哲学資源としての中国思想 吉田公平教授退休記念論集、2013年、455頁(159-183頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鶴成久章(TSURUNARI HISAAKI)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20294845